

Title	預言者思想に立つキリスト教現実主義（ラヴィン教授への応答）
Author(s)	西谷, 幸介
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.57 別冊,2014.3 : 38-42
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=5127
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

ラヴィン教授への応答

預言者思想に立つキリスト教現実主義

西谷 幸介

二〇世紀アメリカの思想界を牽引した神学者ラインホルド・ニーバー（以下RNと略記）の優れた研究家であり、彼の「キリスト教現実主義」思想の創造的継承者であるロビン・ラヴィン教授の講演に応答する機会を与えられましたことを光栄に思い、また感謝いたします。

私個人の感想です。異なる意見もあるかと思いますが、日本におけるRN研究はまだまだ不十分な感否めません。研究者各自は研究の努力を続けていると思われませんが、それでもRN理解の深化とその日本社会への適用における実力不足の感は禁じえません。これがさらに展開される必要を感じます。晩年のニーバーに師事された大木英夫先生（元東京神学大学学長、当時教授）が *Beyond Tragedy* などから得られたインスピレーションを日本の社会時評に応用され、魅力ある論旨で日本の知識人にも深い影響を与えた『終末論的考察』（一九七〇年）等以降は、ニーバー的香りは日本の知的世界全般から消滅しております。RN研究者たちの大学のクラスでは別でしょうが。その意味でも、聖学院大学総合研究所がこうしたシンポジウムを企画し、RN思想の普及に努めておられることにたいして、敬意を表したいと思います。なお、この企画のお陰で、この日、サザンメソヂスト大学の全学教授を青山学院大学にお迎えできたことは、上よりの奇しきお恵みという以外にありません。

ラヴィン先生が講演の始めでRNの「歴史神学」の意義に触れて頂いたことは、日本のRN研究者たちには嬉しいことであつたと同時に、そうしたRN研究の視野の大切さを改めて自覚させてくれるものでした。日本の研究者たちが彼のギフォード講演第二部 *Human Destiny* を重視して歴史神学の視野からRNを理解したのは、ひとえに大木先生の示唆によるところが大きかったと思います。ラヴィン先生がRNの「歴史神学」に照明を当てて頂いたのも、日本のRN研究への社交辞令としてではなく、それが先生自身のRN理解の重要要素であるからだと理解しております。確かに、「ニーバーの神学と政治思想とを統合するものがこの『歴史神学』」であり、それは「世俗の思想家たちにも『政治という営みをめぐる』重要な洞察を解き明かす」ものです。しかも、その説得的な弁証が、歴史は「歴史の外側の超越的な一点からのみ理解可能となりうる」という、まさに神学的な立場から提示されているという点に、RNの神学者としての魅力の真髄があります。

実はラヴィン先生の『ラインホルド・ニーバーとキリスト教現実主義』（一九九五年）に大いに刺激を受けて、「ニーバー神学研究の重要視点——歴史的現実主義」（二〇〇五年）という論文をしるがあります。RNが唱える「キリスト教現実主義」の重要な構成要素が、人目を引くその「政治的現実主義」に留まらず、「神のかたち」に造られた「人間の本性」を基底とする「道徳的現実主義」と、さらにそれが「神の愛」に導かれる可能性を説く「神学的現実主義」でもあり、これら三要素を公平に評価しなければ、RN的キリスト教現実主義は十全に理解されないというその議論は、私にはある種覚醒的であり、説得的でした。その際の、例えばH・モーゲンソーのRN評にたいするRN自身のソフトな訂正の言葉の紹介などは、きわめて印象深いものでした。

私自身の提案はラヴィン先生が明らかにされたRNの三種の現実主義にもう一つの「歴史的現実主義」なる次元を正當に付加しうるのはないか、というものでした。これは政治的現実主義と道徳的現実主義の間に置かれるものです。私の議論は、詳細を省きますと、罪に満ちた人類史にもキリスト教的理念の暫定的実現があり、これは普遍史にお

ける救済史的現実またキリスト教弁証学の基盤となる現実として、キリスト教神学にはたえず自覚されて然るべきものではないか、という主張です。R Nの *An Interpretation of Christian Ethics* 中にある「いかなる歴史の現実も、出来事の後に、理念のただ近似値としてのみ自己を開示する」という下りは、E・トレルチの「キリスト教的諸理念の近似値の実現」の思想を想起させますが、ここでR Nがキリスト教理念の近似値として実現した「歴史の現実」として指摘しているものをカヴァーするのが、私に言わせれば、R Nの「歴史的現実主義」です。ラヴィン先生の本日の講演に関わらせて申しますと、例えばキング牧師に主導された公民権運動の成果の現実を顧慮するような次元です。

この歴史的現実主義の次元の意義は、コンスタンティヌス体制の残滓の中で暮らしておられるキリスト教徒の方々に、それがいわば「自明の事実」化した状況であるために、どちらかと言えば過小評価されるざらにあるのかもしれない。あるいは、この次元の不完全性に不満をもつ完全主義的傾向の人々には、なお評価の対象たりえないのかもしれない。しかし、キリスト教の福音への内面的回心にはまだ至っていないが、しかしキリスト教由来の文化的諸形態はある程度享受しているという——今なおキリスト教伝道の対象である——文化圏の人々にたいしては、このキリスト教の歴史的現実主義の次元は、福音そのものの一種の「接合点」として、きわめて有意味なものであるのです。この関連で、ついでに申しあげれば、S・ハワーワスのような御仁は、コンスタンティヌス体制の中で内向きにR Nのような偉大な先輩を批判して名声を博そうとするよりは、E・ブルンナーなどに倣い、異文化圏にも出向いて、キリスト教伝道を実践されることで、「教会」の真の意義を説きうる偉大な神学者となられるであろうと、私などは考えております。

ハワーワスなどとは対照的に、R Nの「キリスト教現実主義」の真理契機を高く評価し、覚悟をもつてこれを継承しつつ、なおそれが帯びている時代的な制約を——R N生前時代の、またその後の制約も含め——注意深く検証・確認し、時々具体的な状況に適合したキリスト教現実主義の永続的で有効な使信を忍耐強く提示する努力をしておられる

のが——本日の講演からも如実にわかりますように——ラヴィン教授であり、これは日本の政治や社会の問題にRN的キリスト教現実主義を適用しようとする者には模範にすべき方法であり、そこから得られるレッスンは多大なものではないかと思わされます。

本日の講演からRNの「キリスト教現実主義」について教えられる最大の点は、それが根本的にユダヤ・キリスト教的な「預言者精神の伝統」（この表現はラヴィン先生の近著 *Christian Realism and the New Realities*, 2008 から）に根ざす思想であり、個人や国家の自己神格化や根強い「偶像礼拝」の性向にたいする「神の審判」という聖書の教えに立脚するものである、ということでもあります。これが本日の講演では「審判」という見出しのもとに展開された重要議論でした。「神の審判は、歴史に完成をもたらし、歴史それ自体がもたらすことのできない意味の統一性をもたらす」のですが、同時にそれは「歴史的な徳のあらゆる形態……と対立する」ものでもあるのです。この視角が預言者思想の枢軸です。しかもこの場合の「あるゆる」はこの神信仰に立つ者の徳をも含むという点が、RN的現実主義の特徴です。そこからまた、「自由」という主題のもとで、リベラル・デモクラシーにこそ自己批判的省察がたえず求められている、という議論がなされたわけです。

「責任」の議論は、キリスト教現実主義者は、この歴史においては理想が容易に実現されないことを承知しているにもかかわらず、希望を喪失した冷笑主義者となることなく、「少しでも大きい正義と少しでも小さい正義や、少しでも大きい自由と少しでも小さい自由の間の違い」を識別しつつ、具体的な政治的選択を放棄しない「責任ある態度」を貫くべきである、というものでした。

以上の三点をもってラヴィン先生はRN的キリスト教現実主義の要点を示してくださいました。私にはやはり「歴史に対峙しつつ完成させる神の審判」という預言者思想」の指摘が最も印象的でした。これに沿って、私たちはたえず「謙虚」の徳を磨かなければならないのです。そして、とくにそれが意識されるべきが私たちの政治的生活なのです。

講演の終わりでラヴィン先生は「グローバル社会における政治の未来」ということに言及しておられます。上記近著でも、私たちが直面する「新しい現実」とは「グローバル・ポリティックス」であり「多元主義的な社会」であると指摘されています。RNもはるかかつて「世界共同体」について論じ、晩年にはとりわけ「多元性」への意識を高めました。それらのテキストを熟知した上で、その使信を現代にふさわしく適用しうる力が、RNのキリスト教的現実主義思想の継承者には求められています。